

対象の成立状態を知ること—これが私の作画の目的で、「存在可能性」とか「任意選択の可能性」などの超数学命題 **Metamathematic proposition** を追求しようとする気持ちが基礎になっています。

そのための方針としては、数学的に条件づけられた空間、或いは物理的な時間とか空間という様な諸制約を除き去ったものの姿を、構成することが肝要だと思ふ。作品の説明。画面内の互いに矛盾した形態とか具体的なものと抽象的なものとの併用は、概念構成（視覚的な）を目的としています。

偶然的要素の導入は、一現像ムラ、変色、カブリ等々計算された意図以上のものを得ようとする試みです。事実、計算されたもののみならば、本質的には、正三角形を一ヶ描いたのと異なることはありません。

技術的には、多重撮影、多重焼付、スポンジや刷毛による印画現像、人工カブリ、永醋酸による人工変色、稀にはフィルム面加工を行います。色調の調節は、主として八度から八十度間の現像温度の変化によって行います。

なお、時と共に自然に生ずる色調の移動、変色は、報道や観光写真でない限り、偶然的要素として、その時その時の画面の味を生かすのに役立つとみることもできます。

大西茂

大西茂「解説・データ」『別冊アトリエ—新しい写真』 アトリエ出版社 1957年5月34号 141-142頁